

## [研究会報告]

## 第 37 回国際小児保健研究会報告

神谷 保彦（世話人）<sup>1)</sup>

1) 長崎大学大学院国際健康開発研究科

## 1. 概要

- 1) 研究会開催日：2010年9月11日（土）
- 2) 開催場所： 第25回 日本国際保健医療学会学術大会  
（福岡県日本赤十字九州国際看護大学）
- 3) テーマ： 「途上国における児童虐待、ネグレクト」

## 2. 研究会内容

## 演題 1. 「子ども虐待研究と国際的視点」

演者氏名：北野尚美

演者所属：和歌山県立医科大学医学部公衆衛生学教室

## 演題 2. 「小児虐待と子どものこころ—マラウイと日本での経験を通して」

演者氏名：桂佐智子

演者所属：宮川医院（滋賀県）

## 3. 世話人講評：

児童虐待、ネグレクトについて、日本を含む先進国では研究や対策が進んでいるが、開発途上国ではまだ十分でなく、とくに日本の国際小児保健の関係者の間ではあまり検討されていない。少年兵、sexual abuse、児童労働、臓器摘出、女性性器切除などニュースで取り上げられる目だった問題もあるが、今回の研究会では裾野が広いが、認識されにくい家庭内等の身近なレベルでの児童虐待やネグレクトについて、アジアやアフリカにおける現状、ケーススタディ、課題、対策を検討した。

第一演者の北野尚美氏は、「子ども虐待研究と国際的視点」と題して、児童虐待に関するアジアの実践的研究者とのネットワーク、CANAL (Child Abuse and Neglect in Asian League)を紹介し、日本の子ども虐待研究の知見の国際社会への発信の重要性、日本の内なる国際化で経験した症例などを述べた。そのなかで、アジアでも児童虐待に関する法的整備は施行されている国は多いが、人材不足や公的予算が乏しいことから、実際にうまく運用されている国は少ないことを指摘した。また、児童虐待の予防にも繋がる日本での取り組みとして、乳児家庭全戸訪問事業やChild-caring designが紹介された。

第二演者の桂佐智子氏は、「小児虐待と子どものこころ—マラウイと日本での経験と「子どものこころ相談医」研修会受講を通して」を発表した。アフリカマラウイで小児科の海外青年協力隊員として関わったAIDS孤児のケースなどの経験談を語り、アフリカ諸国ではエイズに関連した性暴力に対する意識が高まっているが、他の様々な身体的、心理的虐待、ネグレクトも蔓延している点を指摘した。ま

た、日本では心理的虐待が多く、いじめ、不登校、引きこもりの原因となっていることが認識されていない点を指摘し、養育者の優しいまなざしを内在化するような子どもの感性、親子愛着の絆が重要であり、それが社会的規範の受容にも繋がることを説いた。児童虐待対策について、欧米では、社会の価値観が虐待行為基準を形成するとの認識のもと、虐待対策の歴史が長く、虐待予防のために法、メディア規制、教育に力を入れた制度が充実している国が多いと、アジア諸国との違いを強調した。

国際保健医療学会における研究会であったことから、途上国で孤児や子どもの人権保護 **Child Protection** に関与している人の参加も期待されたが、主には、国際小児保健従事者と日本の小児科医ら小児保健関係者が参加し、日本のケースに関する意見交換が多かった。これは、日本の児童虐待は現在注目され、研修会等での取り上げられることが多いにもかかわらず、率直にどのように感じ、考えるか、複数が集まって、真剣に経験をシェアする機会が今までほとんどなかったことにも関係していると思われる。

途上国と日本のそれぞれの児童虐待の問題を能動的に繋げるのは容易ではないが、日本の小児科医が児童虐待の問題、取り組みを海外に発信しようという話も出て、国際小児保健として、日本と海外をリンクさせて取り組む重要性について改めて気づかされたという意見が多かった。今回の研究会をきっかけに、国際保健と日本とをリンクさせながら、各々の立場から、そして、いずれは共同で考え行動できるようにフォローアップできればと考えている。